

意味を超えたもの 本田一弘

昨年、永田和宏が『現代秀歌』（岩波新書）を、栗木京子が『現代女性秀歌』（NHK出版）を出したので、このところ「秀歌」という言葉が気になっている。「秀歌」とは何か。手元の辞書によれば「すぐれた歌。秀逸な歌。」とある。では「名歌」とどう違うのか。「名歌」は「有名な歌。すぐれた歌。」とある。「秀歌」も「名歌」も「すぐれた歌」である。二つはどう違うのか。つきつめて考えるならば、いつ、誰がどの歌をどのような理由で「秀歌」あるいは「名歌」といったのか、具体的に検証しなくてはならないのだが、ここでは両書と角川『短歌』二〇一五年一月号を讀んで思ったことを三点指摘するだけにとどめておきたい。

一つ目のキーワードは、永田が言う「謎」である。永田は岡部桂一郎の「岩国の膳飯屋の扇風機まわりておるかわれは行かぬを」「大正のマッチのラベルかなしいぞ球に乗る象日の丸を持つ」「行く先の町の名灯るバス過ぎてここは丹後の夕暮となる」の三首を挙げて、「これらは歌を意味でとつては味わえない歌である。（略）歌は意味が通っていることも大切だが、意味だけで終わってしまつては、詩としての味わいも、奥行きも、幅もすべて失われてしまうものだ。」と述べる。そして歌を讀む際に「大切なのは意味がわかつたあと、どれだけその歌が、作者と読者のあいだの懸隔の深さをあらわにしてくれるか」、「その間に横たわる謎」

の大切さを説いている。

二つ目は、栗木が言う「物語」である。栗木は自作の「観覧車回れよ回れ想ひ出は君には一日我には一日我には一日我には一日我にを簡単に述べた後、「歌意はそうなりますが、『君には一日我には一日』の情感は、よく考えるとかなり大雑把。ただ、その曖昧さがかえって読者の心にそれぞれの物語をふくらませ、しらべのなめらかさと相俟って愛唱性を獲得したのかもしれないません。」と述べている。「物語」という語を使って、「秀歌」には文字通りの意味だけではなく、読者の想像力に委ねる要素の重要性を言う。

三つ目は「韻律」である。角川『短歌』の一月号から新しく連載が始まった笹公人の「ハナモゲラ短歌」を讀んで思ったことである。「ハナモゲラ短歌」とは1969年の万年筆のCMで流行したという大橋巨泉の「みじかびのきやぶりきとればすぎちよびれづきかきすらのほつばふみふみ」のように、「意味」ではなく、韻律だけで成立している短歌のことである。笹は今後、連載において短歌の韻律について注目し深く考察しようとしている。

さて、あらためて「秀歌」とは何か。客観的に見てこうだと一義的に言えるものではないが、永田、栗木、笹の指摘が示唆に富んでいよう。三者に共通しているのは「意味」を超えた先のものに目を向けているということだ。「謎」「物語」そして「韻律」。

「秀歌」とは何かという大テーマを考える手がかりとして、自分の歌を讀んでみて、あるいは他人の歌を讀んでみて、「意味」だけに偏っていないか、「意味」を超えた何かを含んでいないかどうか、作歌と讀みと二つの側面において作品を点検してみるのはどうだろうか。